



高等学科卒業前の記念写真・明治39年(1906)5月  
前列左から2人目より志賀直哉、細川護立、木下利玄。前列右端が武者小路実篤



神田錦町校舎



明治34年(1901)春季漕漕会優勝チーム 前列中央が志賀直哉

## 2. 白樺同人と学習院

### 神田錦町・虎ノ門・四谷校舎

ここに一枚の写真がある。  
写っているのは志賀直哉、武者小路実篤、木下利玄たち。  
背景は学習院の四谷校舎である。  
雑誌『白樺』同人の有島武郎、有島生馬、志賀直哉、武者小路実篤、正親町公和、木下利玄、里見弴、児島喜久雄、柳宗悦、郡虎彦……、彼らはこのキャンパスで出会い、共に学生生活を送った。

学習院は明治10年(1877)10月神田錦町で開業し、現在の豊島区目白にキャンパスを構えるまで3度の移転を経験している。一度目は明治21年(1888)9月、神田錦町から虎ノ門の工部大学校跡への移転である。これは神田錦町の校舎が火事で焼失したことによるもので、虎ノ門での2年間の仮住まいを経て、明治23年(1890)9月には四谷尾張町へ移った。ところが、明治27年(1894)6月に発生した地震により四谷校舎の多くが使用できなくなったため、同41年(1908)8月に学習院は初等学科を除いて目白の地へ3度目の移転をおこなう。

白樺同人のうち、神田錦町と虎ノ門の校舎で学んだのは有島武郎ただひとりである。明治20年(1887)9月に9歳で学習院予備科第3級(のちの初等学科4年)へ編入した武郎は、横浜の実家を離れて寄宿舎に入った。武郎は14歳以下が入る幼年寄宿舎の寮生となり、この頃から読み物に親しみ、『少国民』や『少年文学』などの少年雑誌も愛読したという。有島家は明治27年(1894)には一家で東京へ転居するため、有島兄弟のうち学習院で寄宿舎生活を送ったのは武郎だけ

であった。当時のことを弟の有島生馬(本名壬生馬)は次のように回想している。

「毎土曜の午後、兄は寄宿から帰つて一泊した。(中略)日曜日には兄一人さきに夕食をすませ、人力で駅へ送られていつた。われわれはそれを門まで見送り、もぎとられたように寂しかった。兄はしかし一度でも嫌な顔をみせなかつた。」(有島生馬『思い出の我』、中央公論美術出版、1976年9月)

### スポーツマン志賀直哉

武郎をはじめとした白樺同人たちが在籍した四谷時代の学習院では、輔仁会活動が活発におこなわれていた。輔仁会というのは学習院の学生・教職員の校友組織で、当時は陸上部、水上部、編纂部、邦語(弁論)部等があった。水上部には学内選抜の漕漕チームが編成され、年2回の大会で各チームが優勝旗を争った。



四谷校舎・明治23年(1890)頃



四谷幼年寄宿舎

(写真:学校法人 学習院蔵)

武者小路実篤とともに輔仁会邦語部の委員を務めた志賀直哉は、文芸活動のみならずラクロスや競漕(ボート競技)、陸上競技にも熱中しており、明治34年(1901)の春季競漕会では優勝している。そんな志賀のことを後年里見弴はこのように評している。

「少年から青年にかけての志賀は大した運動家だつたよ。(中略)鉄棒も、大車輪をやつて、宙返りでおりたりしてね。ゴム球のテニスや、足袋はだしのベースボールもやつてたし、ボートはC組の本チャンだつた。『本チャン』てのは、正式のチャンピオンのことで、その次のはセコチャンだ。」(里見弴『万能選手志賀直哉』、『海』1980年1月号収載)

明治34年春季競漕会優勝チームの記念写真には、中央で誇らしげに座っている18歳の志賀が写っている。2度目の落第で武者小路や木下と同級生になる前年のことである。

### 同人たちの友情を育んだ学び舎

武者小路実篤は『白樺』創刊号の巻頭辞で「白樺は自分達の小なる力をつくつた小なる畑である。自分たちはこゝに互の許せる範囲で自分勝手なものを植ゑたいとおもつてゐる。さうして出来るだけこの畑をうまく利用しやうと思つてゐる」と書いている。つまり『白樺』は主義主張ではなく、ただ文学を志す者が各々自分の作品を発表する場として作られたものであり、彼らを結びつけたものこそが学習院で共に過ごした時間であった。有島武郎が「白樺ほど大事なものは無い」と日記に残し、里見弴が後年「学習院卒の連中で和気あいあいたる仲間」(『日本経済新聞』1956年3月連載「私の履歴書」)と記しているように、利害関係のない若き学生

## 「学習院と文学 —雑誌『白樺』の生まれたところ—」

### 《特別企画》辻邦生・北杜夫 もうひとつの友情物語

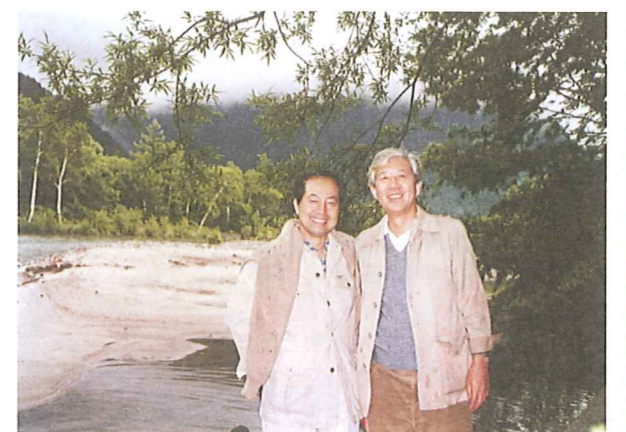
平成22年度学習院大学史料館常設展「学習院と文学—雑誌『白樺』の生まれたところ—」では、特別企画展示「辻邦生・北杜夫 もうひとつの友情物語」をあわせて開催します。

舞台は長野県の旧制松本高等学校(現信州大学)。留年して学生寮に残っていた辻邦生は、一人の風変わりな新入生と出会います。若き日の斎藤宗吉、後の北杜夫です。辻の留年や、空襲による北の一足早い入寮がなければ恐らくすれ違っていたであろう二人は、自分の中に目覚めつつあった文学への萌芽を育て合い、その友情は生涯変わることがありませんでした。

今年7月、二人の友情の証ともいべき復讐書簡集『若き日の友情—辻邦生・北杜夫往復書簡』が新潮社から刊行されました。ここには、ともに青春時代を過ごした二人が互いの存在を必要とし、支えあう姿があります。

「どんな幸運が私に与えられたか知らないが、少なくとも北杜夫と青春に出会ったことだけは、私の生れ星が幸運を指していることの証拠だといまも頑なに信じている」と辻が語る二人の友情を、自筆書簡を通して紹介します。

(展覧会の詳細は、4ページをご覧ください)



左:辻邦生 右:北杜夫(1983年)

(撮影:小島千加子)

時代に出会った仲間だったからこそ、彼らは深い親交と仲たがいを繰り返しながらも互いになくはならない存在であり続けたのだろう。

小説『友情』を書き、色紙に「仲良きことは美しき哉」と讀を残した武者小路実篤。志賀直哉をはじめとする白樺同人との交流を考えると、そこには実に深い思いがあったことに気付かされるのである。

(学芸員 生田享子)